

## 第37回 Kozoom28 テーマ「海の日にちなんで」

清水健二

「海の日」は1995年に法改正され、それまでの「海の記念日」を継承されて祝日になった。1876年明治天皇が東北巡幸され灯台巡航船で、青森から横浜港に無事帰着された7月20日を祝って制定されたようである。

海の日という祝日は世界のどこの国にもなく、日本は海に囲まれた海洋国家として、海なくして繁栄できなかったことからその恩恵に感謝する日とされている。ところが日本の都道府県の中でも海に接しない奈良県はこの日を「山の日、川の日」と条例で定めているから、むべなるかなといえよう。

さて、日本人は海の恩恵に浴してきただけに、日常生活の糧や行動は海と一体化しているといえよう。誰にも海に対する思い出があるが、私は海への初体験は今も忘れられない。私が国民学校の低学年の頃に、親父に連れられて現在も現役で動いている阪堺線(チンチン電車)に乗って、堺の大浜から南へ浜寺あたりへ出かけた。当時は大阪湾の海岸線は遠浅で貝がよく採れた。特に少し深めのところには大きいハマグリが生息していた。その時は親父共々夢中だったと思うが、潮の満ちてくるの分からず、気がついた時に岸へ戻ろうとしても、親父の背丈以上の深みのところは泳ぐしか方法がなかった。私は採った貝を背中に背負わされ、親父の背に乗った。私に首まで海面に沈めと言われ親父はそれこそ必死に泳いだものだ。大した距離でなかったと思うが、親父は頭を沈めて少しでも浮力を利用したのだろう。子供ごころに海は怖いし泳げないといけないと知ったのである。

その後、大戦の影響で南河内(現在の富田林市)へ疎開していた学校では、担任の先生が海軍上がりだったので海の話をよく聞かされた。何より泳げるようにと近くの大和川の上流にある石川に出かけたり、溜池などで泳ぎを覚えてよく遊んだ。おかげで「かなづち」と言われる事がなかったのは良かった。戦後になって中学校時代に、夏休みに浜甲子園で、遠泳に参加し2km程度だったと思うが、完泳した証書をもった事がある。その時、海には海道と言うものがあり、海水温度が異なる水道(みずみち)や、ゴミの流れる道があるなど身体で潮流を体感した。

今の子供たちは、池や川、海など安全地帯内で、しかも救命具を身につけたりして事故防止に対処しているが、それでも毎年多くの水難事故を耳にする度に、自然をなめてはいけないと思っている。

四方を海に抱かれて生きている日本人は海に対して、古代からどんな思いを持ち続けてきたのかと思いつくまま紹介してみよう。

### (1)海と共生した人々

京都の伊根町舟屋を訪れた時、この地に住む人々は、海が



京都伊根町舟屋の家々

我が住み家と思うほど身近に生活し、家の中へ船が入り込める構造になっている。干満差は殆どなく、湾内は高波にあう心配のない場所に集合されている。これに対して、瀬戸内海の島々に住む人々は、それぞれが孤立した生活である。数年前香川県の小豆島へ旅行した時、「二十四の瞳」と題した壺井栄の小説を、木下恵介監督、高峰秀子主演の映画化で知られた映画村へ立ち寄った。残された小学校(分教場)は海の前に在って、この地に育った12人の児童達と大石先生の物語である。四方は海に閉ざされ島に住む人達は他の島との交流は容易でなかった。今でこそ橋が架り、大量の人たちを乗せる高速船が普及しているが、それまでは小さな木造船を漕いで島を出なくてはならず、島内に住む人々は必然的に閉鎖的な生活を強いられていたものである。この小説は海をバックに貧困と厳しい家族制度、戦争の悲劇を描いているが、ヒューマニズムに溢れた温もりと素朴さが感動を呼ぶものだった。



小豆島「24の瞳」映画村分校



小豆島「24の瞳」先生と生徒たち

### (2) 海に挑戦した人々

日本から大陸に向かった古代の遣隋使や遣唐使達は、死を覚悟して大海を乗り切って、日本に大陸文化を伝え日本の国家形成に寄与した。また、昨年海洋冒険家、堀江謙一氏が83歳の高齢で、69日かけて、独り太平洋横断の偉業を遂げた事も真新しい。

### (3) 海に賛美と憧憬を抱いた人々

#### ○藤原忠通(百人一首から)

「わたのはら 漕ぎいでて見れば ひさかたの 雲居にまがふ 沖の白波」

船上からみる大空の雲と波の偉大なスケールに感動した歌である。

#### ○石川啄木(一握の砂から)「東海の小島の磯の白砂に われ泣き濡れて カニとたわむる」

#### ○寺山修司 「海を知らぬ少女の前に 麦わら帽のわれは 両手を広げていたり」 青春の水々しい感性を感じさせる歌である。

#### (4)海を歌った人々

海の歌として日本人の心に馴染み、好まれている歌詞や曲のアンケートを、60歳以上を対象にR&G財団(元の海洋センターで地域活性化のために青少年の健全育成を全国的に活動している)の発表結果によれば、

第1位「海 その愛」加山雄三主演の映画 若大将シリーズもの

第2位「うみ」文部省唱歌(うみは広いな 大きいな……)

第3位「われは海の子」文部省唱歌(我は海の子 白波の……)

共に子供の頃を思い出し、懐かしく、大きな海のイメージを感じる。

第4位「思い出の渚」ザ・ワイルドワンズ(1966年リリース)海にぴったりの爽やかなメロディー。

第5位「Tsunami」サザンオールスターズ(2000年リリース)夏の海をイメージし桑田佳祐が歌う。

海への敬意と畏怖、憧憬と賛美、ロマンなどが渾然一体となって日本人は生きてきた。海に対する心はこの国に住み始めた時代から、親しみを抱きながら巨大な存在として、時に荒れ狂い牙を向ける海への恐怖を覚えて来た。次世代の人達も同様に生きて行くことになる。

私は少年時代から20代半ば頃までは海が好きだったが、社会人になってからは海より山が好きになった。海岸に立つといつも波が打ち寄せ、干満があって定位置にとどまらず、気持ち落ち着かない思いを重ねてきた。山歩きは荒天でない限りどことなく穏やかで安らぎを覚えることが多く、趣向から言うなら海より山の方に足が向く方である。



加山雄三の歌「海 その愛」

作詞 岩谷時子

海に抱かれて 男ならば  
たとえ破れても もえる夢を持とう  
海に抱かれて 男ならば  
たとえ独りでも 星をよみながら  
波の上を 行こう

海よ俺の海よ 大きなその愛よ  
男の想いを その胸に抱きとめて  
あしたの希望(のぞみ)を  
俺たちにくれるのだ



唱歌 「海は広いな」



唱歌 「我は海の子」